

新説柏原池物語

白井啓治

JR石岡駅より北西の方向におよそ一・五キロほど行った所に柏原池というのがある。

現在公園となつてある池は13・000㎡と小さなものであるが、その昔は湿地帯も含めてであらうが六町五反だったというからかなり大きな池であつた。

柏原池は自然池ではなく、三方の谷津から流れ込む水をせき止め灌漑池として作られたといふ。このことは、「常陸国風土記」行方郡の条に、農業灌漑用水を確保するため堤を築き谷津の頭をしめ切つて池を築いた、と記されていることから歴史的事実として認められるのだそうだ。

柏原池を源として霞ヶ浦に流れ込む川を山王川というが、この山王川をはさんで三十六個の正方形の区画が見られ、これは大化改新前後に施行された条里制の遺構と考えられており、柏原条理と呼ばれている。

柏原池の水が、古代以来、田の灌漑に利用され「府中千石」の生産基盤を支えてきたのであつたが、今では田はなく山王川も生活廃水の垂れ流しでどぶ川になつてしまつている。

石岡市教育委員会より「石岡の地名 ひたちのみやこ1300年の物語」という歴史資料本が発行されているが、これを読むと、柏原池にはその水源となつている龍神山にまつわる伝説として、次のような物語が紹介されている。

『大掾氏の勢力が国内に普く、府中石岡城が蔽としてその雄姿を現し、四方を睥睨してゐるときですから、凡そ四・五百年前のことです。

龍神山に棲む龍が月明かりの夜な夜な、美しい少女となつて池畔に現れ景色を満喫しながら散策するのを常としていました。この噂がいつしか府中の町々に伝わり、やがて城中の人達へも届くようになりました。

それは月の澄んだある秋の夜のことでした。墨絵のような松の群立、鏡のような池の水面、千草に集う虫の音、その詩の境地にうっとりしている美少女の前に、いつの間にかすうつと夢幻のように姿をあらわしたのは、一管の笛を携えた城中の若侍、これもまた絵にも見ま欲しい美少年でした。二人はいつしかピツタリと寄り添つていました。しばらくして若侍はやおら身を起こし、唇を湿しました。唳々と冴え渡る笛の音は、天心に届き、月は愈々澄み渡り、夜の更けるのも知

らぬほどでした。

その翌朝でした。若侍は死体となって水面に冷たくなっていました。

のち、里人はこれを哀れみ、懇ろに葬り、池畔に祠を建てました。今の弁天様がそれです。龍はそれ以来この池に姿を現さなくなったとのこと。が、今の弁天様の廻りを、息つかずけんけんして三遍廻ると龍が出てくるという言い伝えもあります。（今泉義文「石岡の伝説」より）

この話を読んで、不謹慎かつ臍曲がりな筆者は、美しき乙女に化身したのは龍ではなくて白い猫であった、と伝説の設定変更を思ってしまった。何故、龍が白い猫になってしまったのかは実に単純。しかし、閑を持って余している筆者にとっては、多忙が突然に降って湧いたものだから、思考の全てがそちらに向いてしまったのである。

秋のある夜半であった。

玄関先でミューミューとかぼそい猫の訴える鳴き声が聞え、出てみると痩せ細った白い猫がこちらを見上げてきた。かがみこんで手を差し出すと、恐れる様子もなく懐に抱かれてきた。抱き上げて体を撫でてやると緊張した小刻みな震えが伝わってきた。そういえば、つい先ほど近所の犬がやけに荒ぶれ、けたたましく吠えさかっていたが、どうやらこの猫、その家の庭にでも迷い込んで追い立てられたらしい。

あまりに痩せて小さな猫だったので、親離れしてまだ間もないのかな、とちよつと情を移して部屋に連れてきて餌を与えたのがいけなかった。そのまま住み着いてしまったのである。

そして二カ月後のことである。急に肥り出したと思っていたら、仔を産んでしまったのである。しかも、この閑をもてあました情に流されやすい筆者の膝に抱かれ、腹を摩られ、ヒーヒーの声に励まされて難産の末に誕生させたのである。

最初の一匹は逆子で死産だった。次の仔は無事に産まれた。

閑をもてあました筆者の手を大いに煩わせて産んだ仔猫だが、母猫の奴めときたら最初に産んだ仔が逆子で難産の末の死産であったためか、相当な体力消耗だったらしく、第二子を産み羊膜、臍の緒などきれいに処理して初乳を飲まずと、精根尽き果てたかボタン・キュー。ところが仔猫を側に寝かしているのは、十分な休眠が得られないと思っただのか、それとも自分が寝ている間に仔猫を押しつぶしはしまいかと心配なのか、筆者が布団を敷くと仔猫を啜えてきて預けてしまったのだ。そして、自分は筆者の労作でしつらえてやった巣部屋に一人ながながと身体を休めるのである。

しかし、無責任に預けっぱなしというわけではない。定期的にやってきて乳を与え、排泄の世話をすると出て行くのである。それが一晩だけなのかと思ったら、日常事にしてしまったのだ。しかも仔猫の奴めも、夜寝るのはこちらの布団と決め込んでしまったのだ。

ただ、感心することに、布団の中にお漏らしをさせたことは一度もない。時間を見計らって母猫がやってきて、乳を与えるとペロペロと排泄を促し、舐めとってくれるのだ。そのように母親の義務を果たすと、一人自分の巣部屋に戻っていくのだ。おかげでこちらは、わき腹にピッタリ

と身を寄せて眠る仔猫を押しつぶしはしないかと気になって毎夜の寝不足である。

本当いうとこの筆者は猫嫌いなのだが、もう捨て猫にするわけにもいかない。おかげで長の時間家を空けることもできなくなってしまう。これを多忙というと笑われるだろうが、閑をもてあましていた者には大層に心煩わされる多忙なのである。頭の中じゅう猫が一杯に溢れているのである。だから龍が白い猫に摩り替わったとしても不思議ではない。

更にといいうのも何だが、このピツタリと身を寄せて、小さく丸まって眠る仔猫を見ながら、やれやれと愚痴を思っていたら、突然に、片岡・村上に伝わる「奴賀姫」の伝説話を思い出してしまった。

その伝説というのはこうだ。

『竜神山のふもとにある村上から西へ約一里半（約6キロ）のところに片岡村という部落があった。

そこに奴賀比古（ひこ）、妹を奴賀比咩（ひび）という兄弟がくらしていた。妹の奴賀比咩は、近隣にも噂されるほどの美人であったそう。

ある時、奴賀比咩が、ひとり家にいると戸をたたく音がした。

奴賀比咩が誰かとたずねたが、なんの返事もなく、不思議に思い戸を開けて外をうかがうと、一人の若者が立っていた。その若者を見て比咩はその男子ぶりに驚いた。

ところが、その若者は、比咩の姿を確認するかのように目をあわすと、そのままだまって去ってしまった。その夜、比咩は、だまって去った若者のことを思い、一晚中、まんじりともできなかった。

若者は、次の日から毎日顔を見せるようになり、ある日突然に、比咩に結婚を申し込んだ。

若者にすっかり心を奪われていた比咩は、喜んでこれを受け入れた。

二人はしあわせな毎日を過ごしていたが、そのうち比咩は妊娠した。しかし、生まれた子を見て比咩は気を失わんばかりに驚いた。

生まれた子は、顔が人間で体が蛇だったのだ。

その子は、昼は眠っているばかりで一言も声を出すこともしなかったが、ある夜、比咩に、自分人間でなく蛇であることを語った。

これを聞いた比咩は「この子は、神の子であろう」と兄と相談し、部屋の中に祭壇をつくり浮き杯の中に蛇の子を入れて供えた。

ところが、一夜のうちに、杯からはみだすほど大きくなっていたので、次の日は、瓮（もたい：口の大きな瓶）の中に盛り移して供えた。

しかし、その瓮にも入っていられないほど大きくなったので、今度は、さらに大きい甕（かめ）の中に入れ供えた。日に日に育つ蛇の子には甕さえも小さくなり、もう、この家には、その子を入れる器もないので、比咩は意を決し、

「神の子であるお前を、これ以上私は養うことはできません。別れることはとても悲しいのですが、どうか父のところへ行って下さい」

と言い含めたのでした。

それを聞いて蛇の子は、しばらく悲しさに涙しましたが、やがて涙を拭き、

「母さま、お言葉にさからうわけではありませんが、一人で父のところへ行くことはできません。なにとぞ、私に一人のお供をお願いいたします」と言った。

「私の家は、お前も知ってのとおり、兄と二人きりなので、その願いはかなえるわけにはゆきません」

と母の比咩はその願いを断ったのでした。

蛇の子は、なんと冷たい言葉だろうと、じつと母の顔を見上げていましたが、その顔に恨みがあらわれてきました。

胸をこみあげてくる気持ちが怒りとなり、眼つきがするどくなるにつれて、口の中から焰のような赤い舌端がめらめらと出たとおもうと、兄の比古におそいかかったのでした。

それをみた母の比咩は、とっさにそばにあった瓮を蛇の子に投げつけました。瓮は蛇の子に当たり、あっけなく死んでしまいました。

死んだ蛇の子は、片岡部落の入り口につくられた塚に葬られましたが、蛇の子は龍となり、龍神山の峯に昇り、そこにとどまったのでした』

この奴賀比咩の伝説が柏原池の龍の美女化身伝説とどう結びつき、それがさらに猫になったのかなどの脈絡はまったくないのだが、毎晩仔猫を啜えて布団に連れてくる母猫の行動が伝説ばなしと交錯し、この閑をもてあましている筆者に現代版の新説柏原池物語を思わせてしまったのだ。

この新説柏原池物語の思いつきに、さらに拍車をかけたのは、龍神山はもともとは雷神山と呼ばれていたのではないだろうかという勝手な想像的仮説をもったことにもある。

染谷佐志能神社に登ってみると、社殿の横に屏風岩と呼ばれる大岩があり、そこに風神の穴というものがある。その穴に手を突っ込むと、雷がなるまで抜けないといった言い伝えもある。そんな言い伝えがあるぐらいなのだから、本家は雷神だと考えてもまんざらトンチンカンな仮説ともいえない。

そもそも龍などという架空動物は大陸から渡来したものであることを考えれば、やはりもとは雷神山の方が臍曲がりな筆者には、素直に納得がいく。しかしこれは、あくまでも閑余の勝手な想像である。

閑余の勝手な想像とはいえ余りに無責任であつても困るので、少しばかり歴史的なことを調べてみると、龍神を祀った神社として染谷佐志能神社と村上佐志能神社が向い合せるようになって、染谷佐志能神社にはタカオカミが、村上佐志能神社にはクラオカミが祀られているのだそうだ。

タカは高、オカミは雨に龍を組み合わせた漢字が当てられるが、ワープロの第二水準にはない漢字である。オカミは蛇龍を示すものであるが、もとは大蛇でありそれが大神と当てられるよう

になったとも言われているが、一説にはオカは『陸』という文字が当てられ、ミは『巳（へび）』と当てられたという説もある。神をとどめまつるという「祀」という漢字が巳と示すから成っていることをみても何となく説得性があるように思ってしまう。

クラオカミのクラは、闇が当てられているが、朝鮮語の『kui=谷』がそのもとであろうという説もある。

蛇は水の神といわれているが、川の様相を俯瞰して見ると蛇のようにくねくねしていることから、水の『ミ』と蛇の『巳（ミ）』をかけたのだろうとも考えられる。そして、川が大きいことから大蛇としたのだろう、とも考えられる。しかし、これは閑をもてあましている筆者が鈴木健氏の本より得た知識から勝手な想像を膨らませてみただけのことであるが、興味を持たれた方は鈴木氏の常陸国風土記と古代地名（新読書社）を読まれることをお勧めする。

蛇が水を司る神だとすると雷は雨を呼ぶ神として祀られていることから考えると、タカオカミと呼ばれた染谷佐志能神社は雨を降らす雷を祀りで、村上佐志能神社は川を示す蛇を祀ったと勝手に説明付けてもあながち間違いで嘘とはいえないのかもしれない。

しかし、これはお伽の物語としての思いつきだ。それに第一こうした発想のもとになったのは、勝手に住人となってしまった猫なのだから、大蛇だ龍だ雷だと考えるよりも、美女に化身して美青年を誑かすのはやはり白い猫の方がいいのだ。この臍曲がりで閑をもてあましている筆者も己が歳をも省みず自分は美男子だと密かならず思っているのだから、己を悲劇の若侍に妄想してみるのならば、美女に化身するのは白い猫である方が、新説柏原池物語としてはピッタリと気持ちに落ち着いてくる。

※

さて、筆者の思いついた柏原池の新お伽の物語とはこうだ。

時代は、歴史資料本に紹介されている今泉義文氏のいう今から四、五百年前よりもっと遡り、千二百年ほど昔のことになる。

柏原池が灌漑用池として、三方の谷津を堰きとめて造られてからおよそ百年余りもたった頃です。その頃には、柏原池にも新しい自然が再生されて、鰻、鯉、鮒、泥鰌、小蝦、たんかい、田螺などが繁殖し、漁で生計をたてる者も何人か現れていました。

その漁師達の間には何時からか、満月の夜になると月明かりの中に絶世の美女が湖畔に姿をあらわす、ということが密かにいわれていました。その話を耳にした村一番の美男子といわれ、自分もそう自惚れていた一人の若者が、絶世の美女とやりに逢って、己が男ぶりで陥落させてやろうと毎晩柏原池にでかけてきて見張っていたのでした。

ある晩のこと、若者は毎晩の見張りにくたびれて、居眠りをはじめたところなにやら甘い匂いのすることに気づき、朦朧とする目をこすり、むりやり開けてみると、目の前を薄絹に身を包んだ若い娘が優雅に過ぎるところでした。

若者は、思わず「おお！」と感嘆絶句の声を漏らすと、娘は振り向いて若者に絶世の美形に神秘的な笑みをつくると、そのまま葦の陰に消え去ってしまったのでした。

この世のものとは思えぬ絶世の美女に微笑みかけられた若者は、熱に浮かされたように毎夜毎夜柏原池に出かけてきて、一睡もせず美女を待ち続けたのですが、逢うことが叶わず、衰弱して寝込んでしまったのでした。

そのことが噂になって、若い男どもが月夜の晩になるとぞって絶世と噂される美女を一目見ると、集まって来るようになったのでした。若い男どもが月夜に柏原池に集まると聞くと、娘達も見過ごすわけにもいかず、連れ立って出かけてくるようになったのでした。

娘達までもが柏原池に集まってくると、男どもはいっ現れるのかも知れぬ噂話の美女を待つよりも、娘等の尻を追いかけるほうが現実的だと、酒宴をはって娘等呼び込み乱痴気騒ぎを繰り返すことになってしまったのでした。そして乱痴気騒ぎに乗じて、あちこちでカッブルが出来上がり、それはそれは目を覆うほどの光景が繰り広げられたのでした。こればかりは今も昔も変わることはないようです。

そんな時、都から旅してきた一人の美男の若き歌人、彦麻呂が、絶世と噂される美女ならば一目逢って恋の歌などの一首も詠みたいものと騒ぎの輪を遠く外れた水辺にやってきたのでした。若き男女の嬌声を遠くに聞きながら、水面に映る満月に美女の微笑を重ねてイメージしてみるのでした。

ほの青く水面に映した満月に美女をダブラせながら、思いを裡に描いているうちに、彦麻呂は本当に美女と対面している気持ちになり、懐から笛を取り出すと、唳々と冴え渡る音を湖面に聞かせたのでした。喧騒に夢中する若者達にはその笛の音は届くこともなく、彦麻呂の周りだけが静謐の気配をつくっていたのでした。

すると笛の音に引かれるように葦の陰から、薄絹の美女が静かに現れ、笛を奏でる彦麻呂の足元にかしずいたのでした。そして、演奏が終わると、二人はどちらからともなく手を取り合って、葦の茂みに姿を隠したのでした。

二人が葦の茂みに姿を隠すとき、一組の男女がそれを目撃したのでしたが、若い熱情にはやっただその男女には、二人を気にとめる余裕はなくなっていたのでした。夜明けの少し前、熱情を燃やし尽くした二人が帰ろうとしたときでした。葦の茂みがサワサワと風に吹かれたと思ったら、ほの白く尾を引いた吹流しのようなものが龍神山に駆け昇るのを見たのでした。

その翌朝のことでした。漁師が、いつものように舟を漕ぎ出すと、棹に水死した彦麻呂の衣が絡みついてきたのでした。

都人の若き歌人、彦麻呂の水死を哀れんだ漁師は、池のほとりに懇ろに葬ってやったのでした。明け方に龍神山に駆け上る白い吹流しを見た若い男女は、その光景が余りに幽玄にこの世の出来事と違っていたことを思い出し、

「あの薄絹の美女は、龍神山の龍が化身したに違いない」
と思ったのでした。そして、それを見てしまった自分たちにも災いが降りかかるかもしれない

と思ひ、彦麻呂の葬られたところに小さな祠を建てたのでした。すると、それ以後柏原池に薄絹の美女が現れるのを見たという話も、噂も聞かれなくなったのでした。

都人の若き歌人、彦麻呂が亡くなってから十年が過ぎ、龍の噂も彦麻呂の噂も人の口から忘れ去られ様とした頃でした。彦麻呂の弟で武麻呂と名乗る逞しい武将が、兄を誑かした憎き龍を懲らしめんと都からはるばるとやってきたのでした。

武麻呂は、龍神山に何日も野宿し、龍の現れるのを待ったのでしたが、龍神山には龍の気配すらありませんでした。

何日待っても龍の現れる気配もなく、食料もそこをついてきたので、武麻呂はいったん山を降りることにしました。そして、一軒の農家に立ち寄り、当分の食料を分けてもらったのでした。

食料を分けてもらった武麻呂は、いかにも物知りそうなその家の老婆に龍のことをたずねたのでした。すると老婆は、

「なんも、龍神山には龍なんておらん。龍神山も昔は雷神山と呼んどった。誰が言い出しか、今じゃみんな龍神山じゃと思つとる。もともと龍なんかおらんわ」

「何と。龍はおらぬとか？」

「おらん」

「されば、柏原池で我が兄者が誑かされたというが、それも真ではないと？」

「ありやあ多分、佐志能神社に住みついとる大山猫じゃろう。猫も大きゆうなると人に化けるっていわれとるでな」

「大山猫？」

「犬ほどに大きい白い山猫じゃ。だけど何んも悪さはせん。神社の供え物を食い荒らしにきよる鼠をな、捕まえて暮らしとる」

「ならば、守り猫というか」

「だなあ。そん猫んやつ。年に何べんか、山から降りてきよるが、そん時の速さつちや大したもんでな、木から木へ飛び移って行くんだが、そんときには白い帯を引くように見ゆるに。初めてそいつを見たもんは、そうよなあ、龍じゃ見間違うんじやなかうかなあ」

「そいつじゃ。その大山猫に違いない。兄者を誑かして生気を喰ろうたに違いない」

武麻呂は分けてもらった食料をその場に放り投げると、大急ぎに龍神山へ駆け戻ったのでした。そして、佐志能神社にやってくると、兄者の敵である憎き大山猫を一刀両断にしてくれようと身構えると、社の回廊に音もなく忍び寄ったのです。

武麻呂が回廊への階段を一足進めたとき、

「もし、武麻呂伯父様ではござりませぬか？」

と回廊の角から少女が現れてそう話しかけてきたのでした。

知らぬ土地で伯父様呼ばわりされる覚えのない武麻呂は、さてはこれが大山猫だと腰の刀に手をかけ勇むと、少女は、

「母様が、伯父様をお呼びするよう申しております」

とにっこりあどけない笑みをつくったのでした。その笑みを浮かべた顔を見て武麻呂はハッとしたのでした。幼さはあるものの、その顔は兄の彦麻呂に生き写しだったのです。そう思ったとたん、武麻呂の勇んだ気持ちしがほみ、刀にかけた手を離してしまったのでした。

「さあ、伯父様こちらへ」

少女はそういうと小走りに回廊の角を曲がり身を消したのでした。

武麻呂は見えない糸に引かれるように少女の後を追うと、回廊の裏側の陽だまりに、老女がうずくまるようにしており、その側に少女がかしこまった様子で座っていました。

武麻呂と顔を合わすと、老女は深深と頭を下げたのでした。そして、腰をおろしてくれるよう言うのでした。

武麻呂は、老女に言われるまま二人の前に腰をおろしました。すると、老女は静かに語りはじめたのでした。

「この三年間、武麻呂様のお出でいただけりよう、毎日都に向けて念じ続けてまいりました。今日ようやく願いが叶いました。武麻呂様がお疑いのように、彦麻呂さまのお命を縮めてしまいましたのは私でございます」

「兄者を誑かして殺めたのはそなたか。憎き奴。そなたは怪猫であろう」

「仰せのとおり私達親子のものと姿は猫でございます。人の世界には怪猫と呼ばれております。でも、にわかにはお信じいただけないことかもしれません、決して魔性を持つものではないでございます」

「言い訳は聞かぬわ。そなた自身、兄者を殺めたことは認めておるではないか。即刻成敗してくれん。覚悟いたせ」

「私の命は武麻呂様に差し上げます。その前に、どうかお聞き届けていただかなければならぬことがございます。これは彦麻呂様との固い約束でもございます」

「なに？ 兄者との約束と？…」

「さようでございます。どうか私めの話をお聞きくださいませ。話が終わりましたら、私めの命、武麻呂様の思うがままにご成敗くださいませ」

「思うがままにだと？ よし、ならば早々に話すがいい」

「私達一族は、三輪山の大神（大蛇）様にお使いいたしておりますものを頭に、国中に祀られております大神様にお使いいたします女系の猫族でございます。この常陸の国には友部村は小原の小原神社に我らの長がお使いいたしております。この私は、小原の大神様と兄弟関係にあります染谷の雷神様にお使いいたしますようお役をいただき、代々お使いいたしております。我が一族は一子女系であることが定めになっておりまして、腹に男児が宿りましたが、生きて産むことは許されておりません。女兒も第一子だけが生を貰い受けることがかかないます。この山は小原の大神様の兄弟関係にあります雷神様が住まわれておりますが、遠い先祖に、あるとき双子の女兒が生まれ、何れを淘汰すべきか迷っておりますたら、小原の大神様が一つの命を雷神様にたまわ

れたのでございます。その末裔が私ども親子でございます。私ども大神様にお使いいたします猫一族は女系にて継なく一族ですから、仔を宿すことはできません。仔を宿さなければ勤めも果たせず一族も絶えてしまいます。そこで本山の三輪山の大神様は、十五の歳の一年間、人への化身を許され、里の優れた若い男衆の精を一度だけ受けるよう命ぜられたのでございます。ただし一度の人との契りで子を宿さなかったら一族もその代で終わらなければなりません。ですから契るときは若者の精をすべて吸い取ってしまう激しさで交わりを持たなければなりません。おいたわしいことですが精を抜気取られた者は水に溺れたり、谷底に落ちたりして命を無くしてしまうのです。また、私達は、化身して人の精を受けるとき、人の男に心移してはいけないことにもなっております。人に心移して生まれた子は、人恋しさを覚えるようになり、神に仕えることはかなわないのでございます。我が一族は、これまでその定めを守って、大神様、雷神様に使えてまいったのですが、彦麻呂様にお目にかかったとき、私はその掟にそむき恋をしてしまったのです。彦麻呂様は、私にこう仰せられました。私の命はそなたにあげよう。そのかわり生まれた子はたとえ命短くとも人に育てよと。我が一族は人に化身することはできませんが、人に化身することは大層な精を必要とし、人のままにおりますと長くに命を持たすことは叶いません。猫はおよそ十五年の命でございますが、我ら大神様、雷神様にお使えする一族は四十五年の天寿が与えられております。人に化身したままにおりますと、長くても十五年の命で終えねばなりません。この娘が七歳になりました時に、人への化身の術をすっかり身につけましたので、彦麻呂様との約束のとおり人に生きてもらうために、武麻呂様に末をお託しいたたく、都に向けて一心に念じてまいったのでございます。娘の名は葉津と申します。このお名は彦麻呂さまがお与え下さったものです。葉津が人に化身いたしますと、女子ではございますが彦麻呂様に生き写しでございます。武麻呂様がお刀を抜けなかつたのはそのせいであつたと思います。改めてお詫びとお願いを申し上げます。どうか葉津を武麻呂様のお側において人間としての天寿をお与え下さい。私の天寿はまもなくやつてまいります。葉津に早くに化身の術を与えるために、そして武麻呂様におこしいただけますよう渾身に念を送りつづけてまいりましたので、私の精もそろそろ尽き果てます。武麻呂様に葉津をお預け申しましたら、私もこのまま人の姿で天寿を終わらせ、彦麻呂様のもとへ人の姿で参りとう存じます。どうかお願いをお聞き届け下さい。このことは葉津にも良く云い聞かせてございます」

「これだけを言い終わつたとき、老女はもう天寿の終りを迎える大婆にまで年老いてしまつたのでした。」

「それは真、兄者の遺言か？」

「真でございます」

そして、その証拠の品として彦麻呂が肌身離さず持っていた笛を懐から出して、差し出したのでした。

「おお真に。これは兄者の笛。そなたの話を信じよう。兄者の遺言、この武麻呂確りとお受けいたす」

「ありがとうございます。葉津、この先は武麻呂様に確りとお従い申すのですよ」
そこまで言うのと、老婆の息が切れてしまったのでした。

武麻呂は、天寿の終えた老婆を背にすると、葉津を連れて龍神山を降りたのでした。そして、彦麻呂の葬られている祠の側に懇ろに老婆を葬ったのでした。

武麻呂は、祠の側に小さな庵を建て、武将を捨てて百姓となり葉津と二人で暮らし始めたのでした。

武麻呂は、兄彦麻呂から預かった大事な娘として、大切に見守り育てたのでした。

武麻呂は武人でしたが、詩詠みや笛にも兄に劣らぬ才を持っていましたから、葉津はその手ほどきを受け、見事な覚えをみせたのでした。柏原池に月を映す頃になると、二人が奏でる笛の音が愛を囁きあうかのように葦の葉を揺らすのでした。その様子は、伯父と姪というよりも、愛し合う二人が笛で言葉を交わしているかのように見えたのでした。

葉津が十五の歳を迎える頃になると、その美形は遠く都にまで届くほどの評判となりました。武麻呂は、娘が十五の歳を過ぎるまでは、決して男を近づけないでくれと言い残していった母猫との約束を守り、評判を聞きつけ、やってくる大勢の若者達を仁王の眼差しで睨みつけ追いつけ返すのでした。武麻呂に睨みつけられた男どもは、それだけで心の臓を矢で射貫かれたかのように消沈し、すぐごと退散していくのでした。

葉津が十五歳をあと三月で過ぎようとするとき、頑健な武麻呂に突然の高熱が襲い、寝込んでしまったのでした。葉津の懸命の看病で高熱を引くことができたのでした。武麻呂の身体は元に戻ることはなく、日に日に衰えていったのでした。

ある夜のことでした。武麻呂は、葉津を枕もとに呼ぶと、

「わしの病は、大神の怒りに触れたものかも知れぬ。おそらくわしの命は長くは持つまい。この満月の過ぎるとそなたは十五を終える。戸外には、わしの身を案じるが如くを装い、言い寄ろうとするものが大勢おろうが、決して甘い言葉に惑わされるのではないぞ。わしが死んで、満月が過ぎたら、葉津は自分の好きにするがいい。人の姿で生きるのもいい。猫に戻るのもいい。お前は、自由に自在であってよい」

と遺言したのでした。

葉津に遺言したことで、安心したのか武麻呂はその夜は幾日ぶりかで安らかな眠りにつくことができたのでした。そして、夢の中で、武麻呂は葉津に姪としてではなく、一人の女性として愛してしまったことを告白してしまったのでした。告白を聞いた葉津も、私も伯父様ではなく愛しい男性に思っておりますとこたえると、武麻呂の床に同衾してきたのでした。

武麻呂は、これは熱に犯されて夢にみる幻想だと自らの心根に恥じながら、葉津を懐に抱いたのでした。葉津の余りにも激しい熱情に、武麻呂はそれが夢の幻想でないことを自覚したのでした。慌てて「葉津、いかん！」と声しようとしたのですが、声もせず身体も動かすこともできなかつたのでした。そして、覚悟を決めた武麻呂は、最後の精を葉津に注ぎ与えたのでした。

翌朝、冷たくなった武麻呂の亡骸を父と母の側に葬ると、葉津は人知れず姿を消したのでした。

その後、三つの墓の前に白い猫の親子が時々やってきて、墓参りするようじつとうずくまっているのを何人もの村人が見たという。しかし、それが葉津とその娘であることは誰も気付かなかったし、思う者もいませんでした。

筆者の考えついた新説柏原池物語は以上のものである。

しかし、考えてみるとこの話、新をつけるほどのものではなく、どこにでも転がっていきそうな話である。そこで、その後日談、といっても時代は二〇〇年以上も過ぎた、二〇一〇年ごろを設定したお伽の物語を考えてみることにした。

※

昔々、まだ月や火星への旅行が現実でなかった二〇一〇年ごろのことです。柏原池の近くに朗（ほがら）という一人の青年が住んでいました。

朗がこの石岡に移り住んできたのは、余命三カ月の末期癌と宣告された父と一緒に過ごそうと思ったからでした。しかし、それは孝心からではありませんでした。

日本にスローライフということがいわれだして間もなくたった頃、それを実行に移した両親達から、その実際を学んでおこうと思ったからでした。といっても母は一年半前に父と同じ癌で天寿を終えていたのでした。

母の死に立ち会ったとき朗は、母の生に対する未練のなさというか、死に対する潔さというか、自分の生き死に対して余りに自然現象としてとらえている姿に感動させられたのでした。そして、これが両親の考えていたスローライフの一面であったのかと思ひ知らされたのでした。

一年後、父にも末期癌の発見されたことを知らされたとき、朗は、十五年間勤めた会社をあっさりと辞め、父と母の行なってきたスローライフを確りと観ておき、自分らしいスローライフを実践しようと決めたのでした。父にそのことを話すと、俺の看病のためではなく朗のスローライフをつくるためというのであれば、それも良いだろうと賛成も反対もしませんでした。

二〇一〇年頃といえば、癌はまだ死の病といわれており、今のように容易に完治する病気ではありませんでした。また、スローライフという言葉もかなり知られていましたが、本当の意味でのスローライフは理解されていませんでした。そして、まだ多くの人たちは本質的な生産を忘れた物質経済に右往左往させられていた時代でもあったのでした。

朗が大学を卒業した年のことでした。

父は、定年には少し間があったのですが、田舎に母と二人で晴耕雨読の暮らしをするのだと行って、茨城県石岡市の柏原池の近くに二〇〇坪少しの土地を手に入れると小さな家を建て引越してしまつたのでした。

朗が、両親から石岡に引越すと聞いたのは、都心に少し外れた日本で一番小さな市である狛江市にあったマンションをリホームするという理由で、わずかの間ホテル暮らしをしているとき

のことでした。

父は突然に宣言したのでした。

「マンシヨンの名義は朗に切り替えておいた。リホームが終わったら朗の好きに使うがいい。父と母は、長年の夢だったスローライフな暮らしを実行するために石岡市というところに住むことにした。あさって荷物がつくことになっているから明日、父と母は身体を引っ越す。石岡の住まいの場所や地図は、郵送するから、お前の家が片付いたら一度訪ねてくるがいい」

いきなりそう言われた朗は、驚きよりも、なんて父母らし過ぎることをするものだ、という感心が先に立ったのでした。

そういえば、朗が大学に入ると、父母は休日になると二人で何処かへ出かけるようになった。時に二、三日泊りがけのこともあった。どうやらその頃から自分たちの越す先を捜し、あちこちを訪ね歩いていたようだったのです。そして、朗が大学を卒業したら、退職して田舎暮らしをすることも計画のうちだったようなのです。

当時の通念からするとまだ、子供が大学を終えたからといって、後は自分の自由にやれというのは考えにくいことだったのですが、朗の父母は、子供が大人になってもまだ子離れ、親離れしないのは不自然なことだと切実に考えていたのでした。

決して子供に対する愛情が薄いということではなく、むしろ当時の親たちと比較すると、感傷を捨て、正當に深い愛情を持っていたといえます。

「父。死ぬ前に俺に確り母と二人で構築したスローライフについて伝承しておいてくれよな。そうじゃないと俺困るからな」

父に余命のことを隠す必要はなかった。父は、自分で告知を受け、数ヶ月の時間しか残されていないことは知っていたのです。朗が父の余命を知ったのは、父自身から知らされたのです。父もまた母と同様、自分の寿命については自然現象と捉え、その事についての欲や未練はありませんでした。しかし、それは生命を紡ぐ意欲がないということでは決してありません。

「スローライフはスローライフさ。何も伝えることはない。自分の自由自在を無理なくやることだ。我を張らず、自然を守ってやれば野菜は勝手に育つ。お前の小賢しい手当てなんか畑の野菜は必要としない。それだけだ」

何の説明もない父の言葉でしたが、朗はそれで十分な気がしたのでした。何かがわかったわけではないのですが、そう感じたのでした。

一〇〇坪足らずの庭の畑でしたが、一年中何かしらの野菜を食膳に上げることができ、父母の二人では余るほどでした。時折、朗のもとに旬の野菜が送られてきたのでした。

「欲張ると土が痩せる。それが秘訣といえれば秘訣だな」

父はそれだけしか言いませんでした。結局は、欲張らず自分のペースでやるしかないのだと朗は理解し、納得したのでした。

父も母と同じに、死を当然の自然現象として受け止め、没していったのでした。

庭には一本の墓標が作られていました。それも生の丸木の一部を削り取ったところにそれぞれ

自筆で名前がかかっているだけのものでした。母の最後の力とそれを支える父の力がそこにはありません。

そこが墓であることを法的に示すためなのだろうか、コンクリートの枠組みが作られていますが、木製の箱に収めた遺骨は土に直埋めして、わずかに盛り土となっているだけです。

朗の父が亡くなったのは秋のはじまりの気配の風が吹きはじめた頃でした。

それが遺言で、母のときと同様、葬儀も行わず、茶毘にふすとそのまま母のとなりに埋められたのでした。

十一月のことでした。不思議なことに、枯れ木だと思っていた父母の名を記した墓標の丸太に突然青葉が芽吹いたのでした。朗にはそれが何の木なのだから分りませんが、土の中に両親の暮らしがまた始まったと思ったのでした。

春になると、小枝も伸び始め小さな木陰を墓の周りに作るようになったのでした。

敷地内につくられたわずか一〇〇坪の野菜畑とはいえ、雨のない日には丸一日の肉体労働が要求されるものでした。畑というものはいくら手をかけてもかけ過ぎということがないことを朗ははじめて知ったのでした。また手をかければかけるほど作物に甘さが加わるのだということも知ったのでした。

時々何たる忙しさを強要する畑なのだと思えることもありました。三日も手を抜くと作物の味がげんきんにも変わってしまうことを実感してみると、もう手を抜くことはできなくなっていました。命を紡ぐための生産の重大さをはじめて知ると同時にこれがスローライフへの覚悟なんだと少し悟りもしたのでした。

父の一周忌を迎える頃から、朗は時々交通事故でなくなった恋人の葉津さんの夢を見るようになりました。

「はて、人恋しさが心に生まれてきたのかな？」

と自分の裡を透かしてみるのですが、人恋しさを自覚させるものは何もありませんでした。

葉津さんは、朗の高校時代からの付き合いでしたが、大学を卒業する頃から、お互い恋人を意識するようになり、二五歳のときに二人は結婚を決めたのでした。

結婚式を十日後に控えた雨の夜のことでした。コンビニにちよつと買い物に出た葉津さんは、暴走してきた自動車にひき逃げされ、死んでしまったのでした。検死の結果、朗もまだ葉津さんから知らされていなかったのですが、葉津さんのお腹には赤ちゃんが生まれていたのです。

葉津さんは、結婚式の日には朗さんにもすてきなプレゼントをしますからね、と言っていたのですが、それは赤ちゃんのことだったのでした。朗は、愛すべき人を一度に二人も失ってしまったのでした。

葉津さんをひき逃げした犯人はどうとう発見されませんでした。その頃から朗は、父母のスローライフということに真剣に目を向けるようになったのでした。

自動車は、一九世紀に発明され、二十世紀に爆発的な繁殖といってもよいほどに、地球の全体に侵食し走るようになったのでした。余りに爆発的な繁殖は急ぐことだけを目立たせてしまい、

自動車の文明の利器としてのモラルを確立する前に、破壊のための凶器としての面ばかりを拡大させてしまったのです。

二十世紀は、地球上のあちこちで戦争という大量殺戮が繰り返された世紀で、それは二十一世紀に入ってもすぐには終わることはありませんでした。しかし、その戦争という殺戮行為以上に自動車という凶器は、多くの人間の命を奪い、地球の環境をも破壊してきたのです。日本でも二十年以上にもわたって年間に一人を越す人たちが亡くなっていったのです。

朗は、葉津さんが亡くなってようやく自分を取り戻したとき、

「人間ってどうしてこんなに理由もなく急ぐんだろう」

と思ったのです。そして、急いでもゆっくりしても時間は同じなんだということに気付かされたのです。時は金なり、ということを使うけれど、みんなはその意味を間違えている。急いで短時間で何かをやっても余った時間は決して貯金のように貯めておくことはできないのだ、ということに悟ったのです。

十時間を一時間で使うことはできなし、逆の一時間を十時間で使うこともできないのです。一時間は、一時間かけてしか使うことができないのです。当たり前のことですが、明日を今日使うことはできません。一日の二十四時間が足りないというのはどこかが狂っているのです。今日やれることだけをやろう。それも欲張らず。

朗は、そう心に決めたのです。だから、父の余命が三ヶ月と知らされたとき、躊躇わず会社を辞めて石岡にやってきたのです。

朗が、葉津さんの夢をよく見るようになったある夜のことでした。庭先でか細くミューミューと猫の鳴く声が聞えてきたのです。今まで一度も猫がやってきたことがなかったので珍しいことでもあるものだ、と朗はカーテンを開けて外を見ると、濡れ縁のところに痩せた小さな白い猫が家の中をうかがうようにうずくまっているのです。

戸を開けて、お前何処から来たんだ、と声をかけると、きちんとお座りをしてミューと鳴くのです。満月のあかりをうけた小さな白い猫は、うす青く染まって見えました。

朗がもう一度、何処からやってきたんだと声をかけ両手を迎えるようにさし伸ばすと、静かに寄ってきて両手の中にスッポリとおさまったのです。

朗が抱き上げてやると、胸の中に隠れるように抱かれ、小刻みに震える身体を必死に抑えようとするのです。きつと放し飼いの犬か何かに追われ、恐怖で一杯だったのでしょう。よく見ると親離れして間もないくらいの雌猫でした。

「お前、随分痩せて細い猫だな。何処からやってきたんだ。綺麗な毛並みをしているから野良猫じゃあないな。家の人は心配しているぞ」

朗が優しく話しかけながら身体を撫でてやると、ようやく震えがおさまってきたのです。

「さあ、もう大丈夫だ。早く家に帰りなさい」

朗は、下に降ろして家の中に入ろうとすると、猫は朗について一緒に入ろうとするのでした。少しぐらいなら引き止めてもいいか、と中に入れてやると、今ではすっかり朗に馴染んだ父の自

慢だった革張りのパーソナルチェアに身を落ち着けたのでした。

「何だ、お前もそこが良いのか。そこは我家の特等席なんだぞ」

苦笑して朗がそういうと、猫はミューと一声鳴くのでした。

「仕方がないな。ちよつとだけだぞ」

そういうと朗は、さっきまで読んでいた本を手に取り、床に寝転んだのでした。でも、猫のことが気になって、本に集中することができませんでした。

猫を見上げると、すっかり落ち着いた顔で朗を見下ろし、しなやかな長い尾をゆつくりと振るのでした。

「そうだ。お前さんお腹すいてないか？　といっても我家には猫の餌なんて置いてないからな。鰹節でもけずってやろうか」

そういうと朗は、相当に使い込んだ時代物の鰹節けずり器でカツカツと鰹節をけずると、小皿に乗せてあげたのでした。猫は美味そうに、それを食べました。

「水もいるな。まってるよ」

水を汲んでくると、猫は右の前足で水を確認するかのような仕草をしたあと、チャピチャピと飲むのでした。飲み終わるとまた椅子の上に飛び上がり、丸まって尻尾の先を小さくしなやかに振って目を閉じてしまったのでした。

それを見ていた朗も、つられて眠り込んでしまったのでした。

どれくらい眠っていたのだろうか。朗は、誰かに指先か何かで顔をトントン突付かれるのを感じ、目を覚ましました。目の前に白い猫が覗き込むようにしながら、手で顔を突付けていたのでした。

「ああ、知らぬ間に眠ってしまった。どうした？　そうか、帰りたくなつたのか。よし戸を開けてやろう」

まだぼんやりする頭で、立ち上がって縁側の戸を開けてやると、猫は庭にポンと飛び出していたのでした。気をつけて帰るんだぞ、と声をかけて後姿を追うと、猫は畑の隅っこところに立ち止まってしまいました。そして、盛り土のあたりをクンクン嗅いだあと土を掘り起こし、用足しをはじめたのでした。

その様子を朗が黙ってみてみると、用足しが終わった猫は、そこを前足で上手に埋め戻し、指の間に挟まった土汚れをブルブルと振るい落とすと、また家の方にやってきたのでした。

「こら、ダメじゃないか。自分の家に帰りな」

しかし、猫は朗の声を無視して家の中に入ると、また椅子の上にポンと飛び乗ってくつろいでしまったのでした。一晩ぐらいなら構わないか、と朗は猫を泊めてやることにしました。

一晩だけと考えていた猫は、二日経っても三日経っても出て行こうとはしませんでした。困った朗は、近所の人に逃げ出した猫はいないかと聞いて回ったのですが、飼い主は何処にもいませんでした。それで、一人暮らしの寂しさも手伝って、家においてやることにしたのでした。

早速猫の餌とトイレ、爪砥ぎ用の柱を買ってきました。やはり猫はどこかに飼われていたらし

く、猫砂を敷いたトイレを用意すると、すぐにそこに行って用を足したのでした。そして爪砥ぎ用の柱に捕まって、精一杯に身体を伸ばすと大きく欠伸をするのでした。

「こうやって生活の支度を整えるとポイントと出て行ってしまうのが猫なんだが、この猫は果たしてどうするのかな」

朗は猫のための支度を一通り整えたのでしたが、何かはまだ足りないような気がしてなりません。

「はて、何が足りないのかな？」

考えてみるのですが全く思いつきません。猫は、今ではすっかり特等席の椅子を自分の居場所に独占してしまったのでした。本当にヤレヤレな猫の奴だ、と思った瞬間、忘れていた一番大事なことに気付いたのでした。

「そうだよ。名前をまだ考えてやっていなかった。同居人、いや同居猫になるのなら名前がなくてはいけない。本当に肝心なことを忘れていた」

はじめて抱いて家の中に入れたとき、何て耳のピンクで綺麗な猫なんだと感心したことを思い出して、『耳』という名をつけることにしたのでした。

「耳ちゃん。なかなかいい名前だろう。ミミちゃんではないぞ。耳ちゃんだぞ」

近所の人や友達が来て、ミミちゃん、と呼ぶたびに朗は、

「ミミではなくて耳ちゃんですよ」

と言い直すのでした。

耳ちゃんが一緒に暮らすようになって、朗は葉津さんの夢を見なくなりました。

「やっぱり人恋しさが出てきたんだな」

そして、人間というか動物というのは一人で暮らすことはできないようになってきているのだな、と思ったのでした。

耳ちゃんがやってきて一月近くが経ちました。耳ちゃんがやってきたのは満月の夜でした。朗は、耳ちゃんを膝に抱いて、縁側で青く光を反射している満月を眺めながら、

「耳ちゃんが来て一ヶ月になるんだね。もう耳ちゃんがない生活は、朗さん考えられなくなってしまうな。黙って出て行っちゃあいけないぞ」

そう話しかけるのでした。

その夜のことでした。朗は、余りにも現実的な皮膚感を持った夢を見たのでした。

誰かに肩をゆすられた感じがして、朗が片目だけを何とかあけてみると、枕もとに葉津さんが座っていたのでした。久しぶりに葉津さんが夢に現れてくれた、と朗は思ったのでしたが、余りに現実感の伝わってくる気がし、思わず知らず起き上がってしまったのでした。いつもの夢の中だと、そこで葉津さんが消えて、夢だったと気付くのでしたが、その夜の夢の葉津さんは消えなかったのです。

その夜の夢の葉津さんは、朗が一度も見たことのない浴衣姿でした。しかも湯上りの様子なものでした。

「美しい」

朗は、思わず声に出したのですが、音にはなりませんでした。

朗は思いました。夢でもいい。このまま覚めずにいてくれ、と。

すると葉津さんは、静かに側によると、朗に添い寝したのです。葉津さんの殺すような息づかいが聞えてきました。

「これは夢の現実だ」

朗は、考えることを止め、葉津さんを確りと抱きしめました。そして、静かに口づけをすると、襟元から手を差し入れたのです。腕を伏せたような乳が朗の手の平の中に柔らかく弾みました。初めて葉津さんに触れたときと同じでした。朗のせきとめられていた人恋しさの情が一気に噴出し、性急に葉津さんの帯を解くとその肌に身体を合わせるのです。

素肌を通して葉津さんの血潮の脈動が伝わり、やがて朗の血潮の脈動に一体化していきました。葉津さんの高まってくる息づかいが怒張した朗を励まし、精の快美の全身に花火するのでした。

花火の闇に消し取られたとき、朗は快い疲労感に包まれそのまま深い眠りの中に吸い込まれたのです。

ミューという鳴き声と手で顔を静かに突付かれるので朗は目を覚ましました。そして、反射的にとなりに手を伸ばしたのですが、手に触れるぬくもりはありませんでした。やはり夢だったのだと思いつながら、熱い皮膚感覚と激しい吐精感はまだ確りと身体に残っていることが不思議でした。そして、何と激しい夢精だったのかと一人照れて下着に手を探ってみるのですが、その痕跡はないのです。

重くけだるい身体を起すと、耳ちゃんが身体をぶつけるように擦り寄ってきてもう一度ミューと鳴くのです。

「耳ちゃん、朗さん今朝は何かおかしいよ。随分寝てたみたいだけど…、おや、もうお昼近いじゃないか。何てことだ。ちよつと待ってね、直ぐにご飯の支度をしてあげるから」

そう言う朗は立ち上がったのですが、腰に力が入らずフラフラする感じが取れないのです。耳ちゃんのご飯の支度をすまし、シャワーを浴びながら激しい交接感の残る自身の男に手を添えてみると、確かに女性に交わった形跡を感じるのでしたが、下着には痕跡がないのです。空砲の夢精なんて在るのか知らん、と苦笑して見るのです。

それからしばらくの間、床につくと今夜も葉津さんと夢に逢えるかと期待するのですが、葉津さんは二度と夢に現れることはありませんでした。

朗が、葉津さんの夢を見てから二ヶ月が過ぎた頃でした。耳ちゃんが急に太ってしまったことに気がついたのです。そして、すきをみては押入れに入るようになったのです。

押入れに入ると、ガリガリ段ボールの箱を引っかいているようです。何度叱ってもすきを見て入るので、ある日朗は、押入れの中を点検したのでした。そうしたら、押入れの隅にある段ボール箱に穴をあけ、中の書類を細かく喰い千切っていたのです。朗は、それが猫の巣づくり行動であることがわかりませんでした。

「耳ちゃん、駄目じゃないか。これ、朗さんが小学生のときのプリントなんだぞ。朗さんのお母さんがきちんとしておいてくれた、大事な宝物なんだぞ」

段ボール箱にしまわれていた朗さんの書いた作文やプリント類が細かく喰い千切られてしまいました。そしてそこにはまるで小鳥の巣のようなものが作られていたのです。

「あーあ、こんなになってしまつて。耳ちゃんのハウス、ちゃんと作つてあげたでしょう。こちら、いけない子だぞ！」

朗は、押入れの中を綺麗に片付け、耳ちゃんが入れないようにしました。それから二、三日過ぎた夜でした。

初冬の満月が冷たく光っていてあまりにも綺麗だったので、朗はカーテンを開け、部屋の電気を消して床にゴロンと横になって眺めていました。すると耳ちゃんが肥った身体を重そうに運んできて朗の懷に抱かれるように寝転んだのでした。

「耳ちゃん、ご飯の食べすぎだぞ。こんなに肥っちゃつて。明日からダイエットしなくちゃ」
そう言いながら、耳ちゃんのお腹を撫でてやりました。すると耳ちゃんは、突然両手を突っ張るようにするとクゥー、クゥーと唸り声をあげながら息張るのでした。朗は、耳ちゃんが悪い病気にでも罹つて引つけでも起したのかと思いました。

慌てて、大丈夫、大丈夫と身体を摩つてやっていると、また痙攣するように息張つて、血尿を少し漏らしたのでした。尻尾のようなものが出てきたのでした。

「ええッ！ 耳ちゃんお産だ。赤ちゃんが生まれるんじゃないか！」

朗は、慌てて何枚かのタオルを用意すると、耳ちゃんを膝に抱いて、一生懸命お腹をさすつてやりました。

「耳ちゃんガンバレ！ ガンバレ！」

最初の赤ちゃんは逆子だったので死産になってしまいました。

耳ちゃんにもう一度陣痛がやってきました。今度は、逆子ではありません。途中で休もうとする耳ちゃんを励まし、顔がすっかり出てきたところで手を貸して、赤ちゃんを取り出してやりました。そして、タオルで鼻や口をふさいでいる羊膜や羊水を綺麗に拭き取つてやり、息を吹きかけてやると、小さくミューと鳴きました。

後は耳ちゃんに任せようと、耳ちゃんの顔のところに赤ちゃんを持っていくと、耳ちゃんは、身体についた羊膜や羊水を綺麗に舐めとつて、臍の緒もちゃんと喰い千切つて処置したのでした。耳ちゃんと生まれた赤ちゃんをハウスにいれ、初乳を啜えさせると小さいながらムグムグと声しながらお乳を飲みました。これで安心です。

耳ちゃんと赤ちゃんが眠つたことを確かめると、朗は、死産だった赤ちゃんを両親の眠るお墓の側に埋めてやりました。天国で父や母に可愛がられると良いなと思つたからです。

ハウスの中が寒くないように、毛布をかけしつかりとくるんでやりました。耳ちゃんは、丸まるようにして赤ちゃんをお腹にしつかりと抱いて寝ています。

「やれやれ、何ということだ。ほんとうにビックリした。耳ちゃんが赤ちゃんを産むだなんて。」

ずーっと家に居たはずなのに不思議なことがあるものだ。でも良いか、家族が増えたんだから」
朗は素直に現実を認め、新しい命の誕生を喜ぶことにしました。

その夜、朗はなかなか寝付けませんでした。耳ちゃんを膝に抱いて、一つの命をとりあげたのですから、興奮はやはり大きく、なかなか覚めないのです。

朗が、寝付かれず何度も寝返りを打っていると、耳ちゃんが起き出して来ました。そして朗に甘えるように顔を擦り擦りするのでした。布団を持ち上げてやると中に入ってきました。頭を撫でてやりながら、

「耳ちゃん赤ちゃん一人で寒くないのかい」

というと、耳ちゃんは慌ててハウスに戻っていきました。

ハウスの中でゴソゴソ音がしていたと思ったら、耳ちゃんが赤ちゃんを啗えてやってきたのでした。そして、布団の中に入ってくると、朗のお腹のところ赤ちゃんを置いて一人でハウスに戻ってしまいましたのでした。

「耳ちゃん、赤ちゃんを置いていたら駄目じゃないか」

朗がそう言っても耳ちゃんは知らん顔でハウスに一人寝てしまったのでした。

朗は、仕方なく赤ちゃんを抱いて寝てやることにしました。もしかしたら子育てが上手くできない猫かもしれないな、と思ったのでした。

「これは大変なことになったぞ」

しかし、朗の心配は余計でした。耳ちゃんは一時間おきぐらいにやってきて、赤ちゃんにお乳を飲ませ、排泄物をペロペロ舐めて処理すると、また朗に預けて出て行くのでした。そして、朝になるとハウスに啗えて連れ戻るのでした。

これが一日だけかと思ったら、翌日も、その翌日も布団を敷くとハウスから啗えてやってきます。そしてとうとうそれを日常にしまったばかりでなく、朗が布団を敷く時間が少し遅くなったりすると、早く敷いてくれと催促するようになったのでした。

赤ちゃんが生まれて七日が経ちました。赤ちゃんに名前を付けてやらなければなりません。いろいろ迷った挙句、ボーイとつけることにしました。

「耳ちゃん、今日から赤ちゃんはボーイという名前だよ。男の子だからボーイだ。いい名前だろ」

赤ちゃんにボーイと名前をつけたその晩のことでした。耳ちゃんが家を出て行ってしまったのでした。

朝になっても帰ってきませんでした。このままではボーイがお腹をすかして死んでしまうと思った朗は、慌てて猫用の哺乳瓶と粉ミルクを買ってきてボーイに与えたのでした。しかし、ボーイは耳ちゃんのオッパイと違うので飲みませんでした。何度も何度もあげてみるのですがやっぱり飲みませんでした。

夜になりましたが耳ちゃんは帰ってきません。朗は、もう一度哺乳瓶を啗えさせると、よほどお腹がすいていたのか、ようやく少しだけ飲みました。でも十分に飲んだとはいえません。この

まま耳ちゃんが帰ってこないで、ボーイがミルクを十分に飲んでくれないと可愛そうだけれど死んでしまうな、と朗は思いました。

夜遅くまで起きて耳ちゃんの帰りを待ったのですが、帰ってきませんでした。

いつものようにボーイを抱いて布団に入りました。ボーイはお腹がすいているだろうに、そんな様子も見せないで、すやすやと眠っています。

その夜、夢の中に葉津さんが現れました。朗は、夢の中の葉津さんに思わず言ってしまうしました。

「葉津さん、困ったよ。耳ちゃんがボーイをおいて出て行ってしまった。猫ミルクも飲んでくれないんだ。このままだと死んでしまうよ」

葉津さんは、とてもうれしそうな顔をしました。

朗は、葉津さんがどうしてうれしそうな顔をするのか不思議でした。それで、本当に葉津さんなのだろうか、

「葉津さん：？」

と訊ねなおすように呼びながら、葉津さんの顔をよく見たのでした。そうすると、夢の中なのですが、朗の恋人だった葉津さんとはどうも少し違うような気がしました。

もう一度、葉津さん、と呼ぼうとすると、葉津さんは優しい微笑を見せて朗に話し掛けてくれたのでした。

ところが、夢の葉津さんは、たいへんなことを告白したのでした。

——私は朗様より耳とお名を戴きました猫の葉津でございます。亡くなられた葉津様のお写真を拝見いたしましたときには私も大層驚いてしまいました。私の母が人に変身しましたときと余りにもそっくりなお方だったので。

私は、古代より龍神山の雷神様にお使えいたしております猫でございます。私ども一族は、人間の男性より精を受けて一子一女で継がないでまいりました。

もう千二百年以上前のことになりましたが、一族の掟を破り人間の男性に恋をしたものがおりまして一時期のこと、お使えの叶わぬこととなりました。猫族が人間に恋をしてしまいますと、雌の愛情が勝り男児を身ごもってしまいます。それで人間に恋することは堅く禁じられておりました。掟を破りましたものには名はありませんでしたが、そのものの恋した方の名は彦麻呂様と申します。幸いなことに彦馬呂様の慈悲深い愛が大きかったですから女兒を継ぐことができました。

彦麻呂様は、契りを結ばれた後、生まれた子に葉津と名付けて人の子として育てよ、とご遺言されてこの世を去られました。彦麻呂様の子、葉津は後に彦麻呂様の弟君の武麻呂様に人として預けられました。武麻呂様の最期の際に精を戴きまして雷神様のもとに戻ってまいりました。武麻呂様の最期の精を戴いて生まれました子も葉津と名付けられ、その後一二〇〇年以上にわたって葉津という名が受け継がれてまいりました。

武麻呂様に命を戴いた葉津のときから、精を戴く方のお命を締めぬために、夢に精をいただく

こととなったのです。おかげでその後一二〇〇年以上にわたって、私達一族のことが人の噂にのぼることなく、葉津の名を継ぐことができたのでございます。しかし、葉津の名も雷神様にお使えいたします我一族もここにきまして最後を迎えることとなりました。

朗様のお手を煩わせまして出産いたしました二匹の子は、朗様の夢の中にその精を戴き身ごもらせていただきましたでございます。もし最初に生まれました子が死産せず無事に命を与えられましたら、女兒の第一子として葉津を受け継ぐことになる筈でございました。そして、ボーイは生をもつて産むことはありませんでした。

私ども一族では男児を産むことは許されておりませんので、たとえ第一子の女兒が死産しましても、第二子が男児であれば決して生を与えることは致しません。しかし、朗様の情け深い愛は故意の死産をお許しにはなりませんでした。

朗様の夢に精を戴いたとき、私は直ぐに雷神様のもとに戻らねばならなかったのですが、どうしても戻ることができませんでした。朗様を愛し、人間の葉津様に嫉妬してしまったのです。そして、朗様のお手を汚さしてしまいました。私の命とボーイの命をお救いいただきました。

人間と同じように、お七夜のようにボーイという名をお付けくださいました。お名を戴いたとき、私はようやくお役を下がらせていただくべくお願いする決心ができました。雷神様のもとにまいりました。雷神様のお怒りに触れてこの命終わろうとも、朗様ならばボーイをお育て戴けるものと信じておりました。

雷神様はお怒りになられませんでした。はるか昔より信仰されてまいりました龍神山も半分がなくなってしまう、信仰を思う人も居なくなってしまうました。雷神様も地の深くにお隠れになられるおつもりだったのでございます。それで私の役目をとくために、第一子の生を止められたのでございます。かわりにボーイに生をお与え下さったのです。

私が、朗様の夢の中に葉津としてお目にかかれるのはこれが最後です。夜が明けましたら猫の耳として庭先からお呼び申し上げます。朗様が、私ども親子を憐れと思ひ、置いてくだされば幸いです。追われても恨みの思ひの持つことはありません。ボーイを連れて山に帰ろうと思ひます。

龍神山は半分になってしまいましたが、私ども親子が生きていくにはまだ十分すぎる糧がございます。山に生きることが、本来の姿ですからそこに不幸せはございません。お名残惜しゅうございますが、そろそろ月の隠れる時間です。朝日のこぼれる前に夢から去らねばなりません。朗様、ありがとうございます。葉津と名乗れる最後が朗様と一緒にであったことは、葉津の最初に戻ったような気がいたします。それでは。――

夢の葉津さんは、朗に話す隙をくれませんでした。しかし、朗には十分に納得できるもので、しあわせな気持ちを持ってきてくれたような気がしたのでした。

庭先にミューと鳴く声を聞いて朗は飛び起きました。そして、戸を開けると濡れ縁に耳ちゃんが座って朗を見上げていたのでした。

「耳ちゃん。何処へ行ってたの。朗さんとっても心配したんだぞ。いけない子だ」
夢の中では葉津さんですが、起きているときはやっぱり耳ちゃんです。

耳ちゃんを抱き上げて、大急ぎでハウスに戻りボーイにおっぱいを啜えさせてやりました。ボーイは夢中になって、両手で耳ちゃんのおっぱいをギュウギュウ押しながらムグムグと喉を鳴らして呑むのでした。

耳ちゃんとボーイは朗の家族になりました。

耳ちゃんは、朗と十年間一緒に暮らし天寿を迎えました。耳ちゃんが亡くなって少し経ってから、朗は笛を手にした葉津姫地蔵を彫りました。

葉津姫地蔵は、大きく育った両親のお墓の木の下に、龍神山を見上げるように立っています。何時からか、葉津姫地蔵はペットの無病息災を叶えてくれるお地蔵さんという噂が広がり、お参りする人が大勢やってくるようになりました。

芽を出した墓標代わりに立てた丸太は榎で、今では天を突く大木に育ち、幸せの一里塚と呼ばれています。この榎の下には、朗と朗の両親、耳ちゃん、葉津になるはずだった赤ちゃん、ボーイが仲良く眠っています。

さてさて、閑を愉しんでいた筆者に、多忙を強制する猫の親子の奴等めに唆されて、新説、珍説何れとも言いがたい柏原池のお伽の物語を展開させてみたが、終ってみると、こうして埋もれかかった伝説に、伝承とはいかないまでも何らかの新珍を与えてみるのは単なる閑の潰しだけではなく、裡に多少の意義も認められて愉しいことではある。

ならば、石岡の地名なる資料本に収められている伝説・昔話に、新奇・珍奇の発想などを与えてみるのも悪くはないな、と思ってみるがはてさてどうなるものやら。末は不問と、鼻毛の抜きながら陽だまりに資料本のめくるも怠惰な睡魔には勝てず、猫の親子を腹に抱いて昼寝するも筆者の多忙。

おわり